

## アダム・スミスの市場理論

田中, 定

<https://doi.org/10.15017/4362447>

---

出版情報：経済學研究. 23 (3/4), pp.1-14, 1959-04-25. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：

## アダム・スミスの市場理論

田 中 定

### (一)

商品流通が支配を確立したのは、資本主義的生産方法が成立してからのことである。それよりいぜん、社会は家父長的な農民家族や、それらの共同体的な集合体の農民部落や、領主的支配の構造としての封建的領地などのような、そのおのおのにおいて、原料の獲得からそれを消費にむくようにするためのさいごの仕上げにいたるありとあらゆる経済的労働を遂行する経済単位によつて構成された。

その典型は三圃制農業に見られるところである。三圃制農業はゲルマン民族が定住また支配するにいたつたところではどこでも行われた農業制度である。ゲルマン民族は他民族に先んじて大土地所有制度と封建制度を創設した。アダム・スミスはこの間の事情についてのべている。「ゲルマン民族とスキタイ民族とがローマ帝国の西部諸領を蹂躪したとき、この一大変革について起つた混乱は数世紀に亘つた。これらの野蛮人は古来の住民に対して掠奪暴行を行つたので都会田

舎間の商業が中絶した。都会に行く人なく、田舎は荒廢し、かつてローマ帝国の下にある程度富裕を誇つたヨーロッパの西部諸領は貧窮と野蠻のドン底に陥つたのであつた。その混乱が収まらないときにあたつて、これらの国々の首長巨魁はこれらの国々の土地の大部分を獲得又は横領した。そしてその大部分は未耕作のまゝに放置されたが、未耕地と既耕地との別なく、尺寸の土地といえども所有者の定まらないものはなくなつた。それは全部ろろ断され、しかもその大部分は少数の豪族によつてろろ断された。<sup>1)</sup>」

一つの例をイギリスの場合にとつてみる。一〇六六年エドワード王が歿した後、ノルマン人のウィリアムがイギリスを征服して王位についた。征服後さいしょに彼がなしたことは全国土の没収とそれを自己の所有とすることの宣言であつた。かれはこれをノルマンの従者や、アングロサクソンの大小名や、王および従者の帰依する僧院長に授与して封建制度を確立した。これら大小の封建的領主の領地にはその単位として村落があり、更にまた家父長的農民家族がある。村落はすでに個別所有に移されていた屋敷地と、三圃制度のもとにおかれていた耕圃と、總有地として利用されていた森林と牧場とから成る。屋敷地は住家と農場附属物の敷地、蔬菜、麻、果物などを栽培するための地面である。屋敷地の集合体である部落をとりまいて耕圃が拡がつている。それは三つに分割され、またそのおのおのは耕作分に分割され、個々の農民家族に割当てられる。耕圃の外圃には森林と牧場とがあり、分割されないで共同で用益される。

三圃制度の中心は耕圃にある。それぞれの家族はそれぞれの耕作分を耕作する。しかしそれは、そこに穀物が植えられる場合だけのことであつて、収穫が終つて、そこに放牧が行われるようになれば共同で利用しなければならぬ。放牧経

管が農業経営の決定的な一部門をなしたこれらの民族の場合、それが一般の栽培農業を害しないようにするため、放牧用のまとまつた地面を設けることが必要であつた。そうするために、同一の分割地内にある個別の耕作分を同一の方法で耕作させ、三つの分割地をその一つには冬作物を植え、第二には夏作物を植え、第三は休耕地とすることとし、順次に毎年ローテーションを行つていく制度が樹立されることとなつた。いちばんの眼目は第二の夏作物の収穫が一斉にすまされ、そのあとを柵でめぐらして放牧地にすることであつた。そのためには夏作物の植えつけを一斉に行うことが必要であり、またそのためには冬作物についても同じような配慮をしなければならなかつた。かくして三圃制度特有の強制耕作制度が生まれた。村落に見られた共同体的な濃厚な色彩は農業がこのように共同的に行われたことを基礎としたものである。

三圃制度の農業が、げんとして保持されるかぎり、家畜は人間に対して労力と乳と肉と衣服の原料を供給してくれるのみでなく、耕圃の肥度もほとんど恒久的に維持してくれ、穀類の供給を保障し、その他必要な厨房用材料、衣料材料は屋敷地が供給してくれ、森林と固定放牧地とは建築用材と薪炭と家畜飼料を提供してくれる。それ等の原料は家内の手工業によつて消費に適する様に村落の内部で加工されるのであつた。農民的生存の裕富と安定は三圃制度と農民的家内手工業の上にその基礎を置いていた。森林と放牧地とを有する三圃式は農民的家内手工業に伴われる事により、外部からの輸入や移入を少しも必要としなかつた。農民生活の為の必需品の総ては村落の内部で自ら供給する事ができた。「外国貿易もなく、また精巧なる製造業もない国においては、大資産家は、彼の土地の生産物のうち耕作者の生活を維持してなお余つた大部分と交換しうべき何物ももたないから、その全部をその家庭における田舎風の歓待に消費する。もしもこの剰余生

産物が一百人または一千人を維持するに足るならば、彼はこれをもつて一百人または一千人を維持する以外には利用することができない。そこで彼は常に多数の従者および家の子に取り囲まれているが、これらのものはその扶持に酬うべき何等の対価を払わないで専ら彼の恩恵に浴して生きるものであるから、彼等が彼に服従しなければならないことは、なお兵士がその備われている君主に服従しなければならないのと同じ訳である。ヨーロッパにおいて商業及び製造業が発展を遂げる以前、上は国王より下は男爵にいたるまで富貴の人々がやつた歓待振りは、今日の吾々の想像も及ばないものであつた。ウエストミンスター・ホールはウイリアム・ルーファスの饗宴場だつたのであるが、あれでも彼のお客の割には決して広過ぎはしなかつたであらう。またトマス・ケベックの華美の一例としては次のような話がある。即ち、彼は席を得ない騎士や従者やらが床に跪いて御馳走をたべるときその美しい着物が汚れてはならないからというので、彼の客間の床の上にその季節のきれいな乾草や燈心草を敷きつめさせたということである。ウオリックの大伯爵は彼の各地の荘園において毎日三万人を歓待したと伝えられている。この数は誇張であるとしても、ともかくそういう誇張を許すほどにそれは大袈裟なものであつたに違いない。現に割合に最近までスコットランドの高地々方の多くの部分においてはこれに近い歓待が行われていた。商業や製造業があまり知られていない国民においては、すべてこれが普通のことであると思われる。<sup>2)</sup>

大土地所有制度が諸豪族間における武力的暴力的抗争の中に成立したその過程において、農民や農民村落はそれらの暴力のいずれかに庇護をもとめ、依存せしめられる。大土地所有制度が成立するやいなや、この制度の自然経済的な構成を基礎として特有の封建的な身分関係が確立される。「ヨーロッパの古い状態においては、土地の占有者はみなテナント

・アト・ウイル（地主の自由に解約しうる小作人）であつた。彼等は殆んど又は全く奴隸であつて、たゞ古来ギリシヤ人やローマ人やの間で、乃至はわが西インド諸島の植民地においてすら知られてゐる奴隸に比してやゝ緩かな種類だといふのに過ぎない。彼等は主人に属するというよりはその土地に属するものと考えられていた。それ故その土地と一緒ならば売られたが、切り離して売られることはなかつた。彼等は主人の同意さえあれば結婚することができたが、一旦結婚した上は、主人といえども夫婦を別々の人に売つてそれを離別させることはできなかつた。また主人が彼等を不具にしたような場合には普通僅かなりとはいへ、刑罰を受けねばならなかつた。それでも彼等は財産をもつことは許されなかつた。彼等のもつものは直ちに主人のものであつて、主人は任意にこれをとりあげることができたのである。こういう奴隸を用いてやる耕作や改良が、主人のものであるのは当然だ。そして、その費用も主人のものであつた。種子や家畜や耕作器具のすべては主人のものであつた。すべては彼の利益のためであつた。そして奴隸がうるところはその日の生活だけであつた。こういう場合においては、その土地を占有しそれを彼自身の奴隸を使つて改良したものもとより土地の所有者その人であつた。この種の奴隸制度は今もなおロシア、ポーランド、ハンガリー、ボヘミア、アラヴィヤその他ドイツの一部に存する。これが全然その跡を絶つに至つてゐるのは、ヨーロッパでは西部乃至西南部の諸国だけである。<sup>3)</sup>」

- 1 アダム・スミス「国富論」第三篇 第二章。大内兵衛訳 (一) 一八九頁。
- 2 アダム・スミス「国富論」第三篇 第四章。大内兵衛訳 (二) 二二二頁。
- 3 アダム・スミス「国富論」第三篇 第三章。大内兵衛訳 (三) 一九五頁。

## (二)

このように三圃制度の農業と家内手工業とによつて自然経済の基礎が与えられ、嚴重な身分制度がうちたてられていたころしたきような封建的な社会構造がようやく動揺しはじめるに至つたのである。それは外国貿易が発達し、また製造工業が勃興するにおよんでからのことである。「外国貿易と製造業とは、漸次に大土地所有者に彼等がその土地の全剰余生産物と交換し得るような、そしてまた小作人や従者にわけてやらないで自分だけで消費することのできるような、ある物を供給するに至つた。何でもみな自分のものだ。人には一切やらない。というのが、世界のいかなる時代においても、人間の支配者の卑しむべき金言であつたと思われる。それ故に、彼等が彼等の地代の全価値を自ら消費する方法がみつければ、彼等はもうそれを他人に分けようとは考えなかつた。恐らくは一対のダイヤモンド入りのバックルまたはこれに類する埒もない無用のものを得んがために、その代りとして彼等は一年間に亘る数千の人々の生活資料を、或はそれと同一物である生活資料の価格を与えた。そして、それと一緒にこの生活資料が彼等に与えることの出来たすべての貫禄と権力とをも与えた。というのは、バックルは完全に彼等自身のものとなり他の人間は一人としてその分前に与えることはできないものであつたのに、昔流の消費ならば、彼等はそれを少くとも一千人に分けていたに違いないからである。この両者のうちどちらかを選ばねばならなかつた判断者にとつてこの差異は全く決定的であつた。かくしてあらゆる虚栄心の中で最も

子供らしい最も劣等にして最もけがらわしいものを満足することのために、彼等は彼等の一切の権力と權威とを次第に引き渡してしまつたのである。<sup>4)</sup>

こゝに外国貿易といつてゐるのは、いわゆる地中海貿易時代の貿易のことで、それによつて宮廷財政のもようが変えられ、延いてはまた封建的な権力機構にまで大きな影響を与えることになつたことはこゝにのべられてゐるとおりである。

地中海を中心とした当時の貿易は東洋の珍奇品を主とし、権勢者の虚栄と結びついてゐた。その虚栄は、一方では家臣の離縁をひきおこし、そして他方ではまた貢租の誅求をひきおこした。一方では制度をこわし、他方では制度をますます嚴重にするという矛盾したやり方がはたらいた。しかし、最後に上部からのそうした動きによつてではなく、下部からの動きによつて封建社会の全体は根底から崩壊せしめられた。それは製造業が勃興したことによつてである。

製造業は、ざいらい農ん家族の家内手工業としていとなまれたものである。自然経済が、そうして封建制度がそれを土台としてあつたことはすでにのべたとおりである。ところが、製造業が農ん家族の家内手工業としてではなく、それから分離して専門的な職業として営まれることになるわけである。そうなれば事情は全く變つてしまふ。またこのようにして原料産業から加工々業が分離するのみではなく、原料産業および加工々業のおのにおいて種々様々な特殊部門が分離し、それらの各々において特殊な生産物が生産されることになれば更に一段と著しい変化が起つてくることになる。すなわち、生産物がすべて商品として生産されることとなるのである。それは必然に流通に投ぜられ、貨幣とまたは商品と交換されねばならないこととなる。人々の全生活がこの交換を通じてはじめて行われるということとなる。

このような変化が社会構成上の変化であることはいうまでもないことである。アダム・スミスは国富論第一篇を分業論にかきおこしているのであるが、分業の發達の結果としてこゝに新たに誕生した商品生産社会の理解のために彼は「人々が商品を貨幣と、或は商品を商品と交換するに當つて自然的に守らざるを得ない法則は何であるか、これが私が吟味しようとしている問題である。この法則は商品の相對價值、或は交換價值とよばるゝものを決定するものである。」<sup>5)</sup>として、経済学をうちたてるに至つたのである。かつては原料産業と加工々業とは家父長的農民家族の中に相住いしていた。その結果としてのいろいろな制約がおかれていた。いま加工々業は原料産業から独立し、そうすることによつて制約から解放され、その生産性には新しい段階が現われ、支配者の上層を一部分だけではなく、農民階級のすべてをも含めて商品流通の相手とするに至つた。そしてこのようにして商品流通が支配を確立していくにしたがつて必然的にそこには経済的な諸關係が形成されることとなる。スミスはそれゆゑに経済学の建設にすゝまねばならなかつたのである。

この場合において、原料産業の首位に立つ農業は、一方の加工々業がその内部でさまざまな部門を相互に分離し、造り出すと同じように、それ自身の内部に或は地方別に或は経営組織別にさまざまな方向での専門化をとげることとなる。このような商業的農業は加工々業の分離と独立、つまり社会的分業の必然の結果として發生する。すなわち、加工々業の原料に対する需要の増大、ならびに都市人口の生活資料に対する需要の増大に伴つて發展する。これら二つの需要は、前者は増大した全部が有効に働く性質のものであり、後者は生活水準を低くすればそのまゝの大きさの需要が生ずるといふことにはならない。従つて前者の影響は後者のそれよりはより直接的なものであり、より強く現われる。

さて商品経済は資本主義へと發展する。商品流通の最高の形態は資本家的生産を基礎としてうちたてられる。こゝには単なる商品生産者のかわりに一方のがわには生産手段の所有者が、他の一方のがわには賃金労働者が現われる。かつての獨立小生産者はかれら自身の生産手段、すなわち土地、労働用具、作業場などを失う。それは他人の手に移り資本へと轉化され、工場制手工業の段階を経て、機械制近代工業へと發展する。人間労働の生産力はこうした資本主義の成立と發展をつうじて飛躍的な増大をとげる。と同時に獨立小生産者が自己の消費にあてた生産物は新しい資本制商品として生産されることになり、そのことによつて商品流通は増大するのみならず、生産が拡大するに應じて新しい道具や機械、原料、補助原料、運搬手段、等々に対する生産力の増大そのものからする新しい需要が作り出される。そのことによつて商品流通はまた著しく増大することになる。商品流通の流れの中に、この生産手段が参加するということは資本主義的生産方法と直接に関連したことからである。商品流通はそのため質的な拡大をとげるに至る。

資本家の致富が消費手段に対して市場の増大を意味するものであることもいうまでもないが、小生産者が自己の生産手段をうしない、貧困化することすらも消費手段に市場を形成することになる。家父長的農民の安樂が消えてなくなることゝ、かれの手に貨幣手段の量が増加することは両立する。かれの破滅が進めば、進む程、かれはますます労働力の販売にたよる以外にはなくなり、生活手段のますます大きな量を市場において獲得しなければならなくなる。かくして農民の遊離された部分と共に彼等の栄養手段もまた遊離される。それらは、可変資本の、すなわち労働力の購買に向けられる資本の素材的要素に転ずる。農民の収奪と配置とは、労働者と共に単に彼等の生活手段および彼等の労働素材を産業資本

のために遊離するにとまらない。それは国内市場を造出する。

資本主義はかように商品流通をますます支配的なものたらしめる。ところで市場が増大し、また市場が拡大することによつて、市場は事実上社会の経済的諸行程を統御し規制するにいたる。かゝる関係は、社会的分業の發展の結果としてもならされたものである。社会的分業はそのものとしては職分を分化せしめる過程であるが、分化したあとあらゆる職業を市場という媒介物を造出することによつて再び全一的な統一の中に編成することになるのである。

4 アダム・スミス「国富論」第三篇 第四章。大内兵衛訳 (二) 二三九頁。

5 アダム・スミス「国富論」第一篇 第四章。大内兵衛訳 (一) 六四頁。

(三)

そこで市場の理論について直ちに問題となることは市場の内部法則はどうであるかという問題である。市場とは生産物が相互に等価として置かれる関係をいう。等価として置かれる商品はその各々が価値を有する。アダム・スミスはその商品の価値は生産のために投下された人間労働の量によつて決定されるとした。商品の価値は資本家階級と労働者階級と地主階級とが社会の三大階級として存在する資本主義社会においてはそれら三大階級の所得、すわち利潤と労賃と地代の元本をなす。アダム・スミスは各階級のこれらの所得は商品価値の構成部分として含まれていなければならないとした。彼

はいう——「例えば穀物の価格においては一部分は土地所有者の地代を支払い、他の部分はその生産において使用せられた労働者と役畜の賃金と維持費を支払い、そして第三の部分は借地農業者の利潤を支払つてゐる。これら三つの構成部分には、直接にあるいは究極において、穀物の全価格をなすように思われる。借地農業者の資本又は家畜および他の農業の補助手段の損耗を補償するために、第四の部分が需要であると想定する人があるかもしれない。だが人はありとあらゆる農業上の用具や補助手段の価格は 例えは役馬の価格のごときも、それ自身これら三つの価格構成部分から復合されるものであることをしらねばならない。」<sup>6)</sup>

「故に穀物の価格は馬の価格も含んでゐるにせよ、総価格は直接にか又は結局においてか三つの部分に分解する。」<sup>7)</sup>

スミスの未熟な理論をいちいち批判し展開することはできないが、フィジオクラートの純生産の理論にたいして労働価値説をうちたてたかれが、資本主義社会における商品価値の不変資本、可変資本および剰余価値の三部分への分解を見究めえなかつたことは、彼の最も大きな弱点としてあげねばならないことである。独立生産者が資本家と労働者とに分化する結果、かゝる分化が行わる以前においては量的に等しいものであつた投下労働量と支配労働量との間に、前者よりは後者が量的に大であるという新しい事態が発生する。このことはスミス自身がぶちあたつた問題である。彼はそこから出発して資本主義社会においては生産物の一部は資本家のために留保されるにいたることを、そしてこの留保は、労働者の雇入れのために前貸しされた資本部分、すなわち労賃は、労働者の維持に必要とされる以上に剰余を生産することによつて行われることを展開すべきであつた。しかるに彼は投下労働量説をすて、支配労働説をとりあげ、それと同時に労働価値

説から生産費説へと俗悪化のみちをたどつた。資本主義社会の根底に横たわる剰余価値の問題からはそれてしまつた。かれのいう資本家の利潤、および土地所有者の地代は、生産費の項目である。それらは商品価格の構成部分ではあるが、商品価値はそれらをもち出すことによつては説明されない。商品価値は商品価格の前提として存在するものであり、まずそれが明らかにされねばならないのである。資本家の利潤、及び土地所有者の地代をもち出す前に、まず剰余価値の成立を明らかにすることが先決の問題である。

もう一つの問題は、かれが不変資本は結局において、労賃、利潤、地代に分解するという見解をとつていふことである。彼はこのようにして問題の解決を無限のあなたに押しやり、結局において何物も説明していかないのである。彼をこのような誤りにみちびいた原因は不変資本と可変資本との根本的な区別、すなわち、前者はすでに体化された労働であるのに対して後者はそれ以前の生きた労働であり、それ故に剰余価値を新たに生み出すものであることを認識することができなかったことに存する。

商品の価値は資本主義社会においては次の三つの部分から成立つということになる。(一) 不変資本 (二) 可変資本 (三) 剰余価値。アダム・スミスはこれを (一) 労賃 (二) 利潤 (三) 地代とした。もしアダム・スミスのいうがごとく、商品の価値を労賃、利潤、地代として労働者、資本家、土地所有者に割当てゝしまい、それぞれ所得として個人的に消費してしまうものとするればどういふ結果になるであろうか。それは個人的な消費がそれを基礎として成立つてゐる年々の生産的な消費の全部を喰いつぶしてしまうことを意味する。このことは別の箇所アダム・スミス自身問題にしてゐるところで

ある。「一大国のすべての住民の総所得は、その土地と労働の全年生産物を包括する。純所得は第一に彼らの固定資本および第二に彼らの流動資本の維持に対する支出を控除したのちに彼等の手許にのこつているところの部分、すなわち彼等がその資本を侵蝕することなくして彼等の直接の消費に当られる元本に附け加えうる、若しくは彼等の生活必需品、便益品、および娯楽品のために支出しうるところの部分を含む。」<sup>89</sup>

国の総生産物のうちから不変資本を除外して、残余の可変資本部分および剰余価値部分とは個人的消費のなかに入る。不変資本は個人的消費のなかには入らない。彼はこゝではこのように主張している。社会的総資本の再生産と流通の過程を明らかにするためには、個人的消費の対象となる生産物部分と、生産的消費の対象となる生産物部分、いゝかえれば消費手段と生産手段とへの総生産物の二分分割が必要とされる。アダム・スミスがこゝで述べていることはそのことの認識に接近している。すでに述べた如く社会的分業によつて個別の生産に移された各種各様の専門的な産業は、相互に市場となり合い、個別の生産物の価値を實現する。個別の生産物が個々の交換を通じて結び合う価値論的な観点とは別に、もう一つのあらたなる観点、すなわち産業の全体を通じての生産物の自然形態における代償の観点を設定しなければならぬ。そうしなくては社会全体としての商品価値の存在をとくことができない。社会の全体としての生産物は、個別の生産物と同様、不変資本、可変資本、および剰余価値から成立つと共に、それらはまた生産的消費にあてられる部分と個人的消費にあてられる部分とに二分分割される。商品価値の三部分分解と社会的産業の二部門分割とは實現理論の基本的命題である。

- 6 アダム・スミス「国富論」第一篇 第六章。大内兵衛訳 (一) 一〇五頁。
- 7 アダム・スミス「国富論」第一篇 第六章。大内兵衛訳 (一) 一〇六頁。
- 8 アダム・スミス「国富論」第二篇 第二章。大内兵衛訳 (二) 二五頁。